

虹の彼方に

オーヴァー・ザ・レインボウ

高橋源一郎



新潮文

オーヴァー・ザ・レインボウ

虹の彼方に

新潮文庫

た-47-1



昭和六十三年四月十五日 印刷
昭和六十三年四月二十五日 発行

著者 高橋源一郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
業務部(〇三)二六六一五一
電話 編集部(〇三)二六六一五四〇
振替東京四一八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・大日本印刷株式会社 製本・加藤製本株式会社

© Genichirô Takahashi 1984 Printed in Japan

ISBN4-10-107811-4 C0193

新潮文庫

オーヴァー・ザ・レインボウ
虹の彼方に

高橋源一郎著

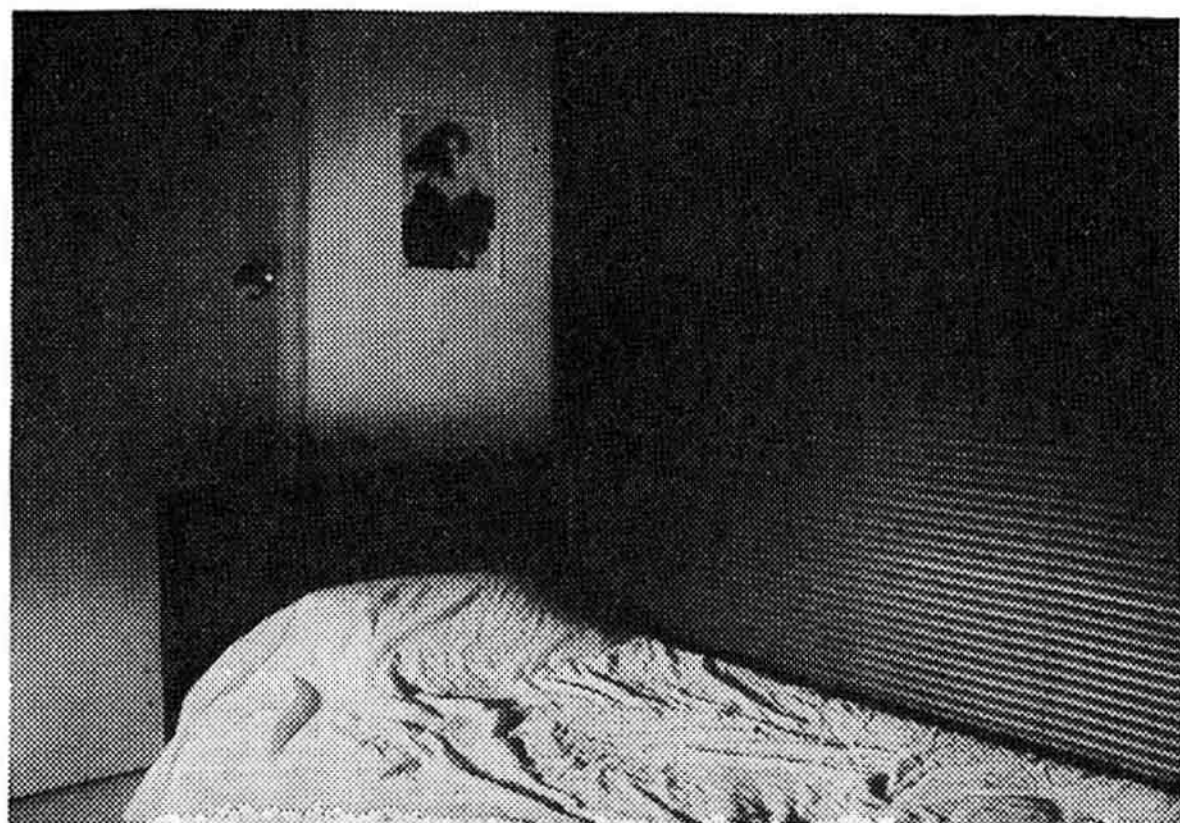


新潮社版

目次

- 第一話 虹の彼方に……………七
- 第二話 ラストダンスは私に……………三七
- 第三話 クリストファー・コロンブスのアメリカ大陸発見……………七一
- 第四話 戻っておいで『カール・マルクス』……………一一
- 第五話 戻っておいで『カール・マルクス』 結末篇……………一四三

虹オーヴ
のアー
彼ザ
方レイ
にンボウ



第一話

虹オーヴァーの彼方ザ・レインボウに

「いったいどこから帰って来たんだい？」
「オズの国からよ」ドロシーは、おごそかに答えました。

ライマン・F・ボーム『オズの魔法使い』

そしてわたしが話す番になった。

「だが、ほんとうのところ、その一切の原因は『カール・マルクス』本人にあった。

何故なら、もうずっと以前から『^{*1}』はいたるところに存在していたからである。

右目を瞑れば、残った左目に『^{*2}』は映った。

左目を瞑れば、残った右目に『^{*3}』は映った。

両方とも瞑れば、ちょうど『ウルトラマン』が一九七三年一月二日以来毎晩、ただ一晚の例外さえなくジャンプするカンガルーの夢にうなされつづけたように、『^{*4}』の夢

に悩まされねばならなかった。

そいつは、その煮ても焼いても食えない代物である『^{*5}』は、現実が存在しなく

とも、資本論が存在しなくとも、金子光晴が1ダースも集団で現れようとも、機械仕掛けのプロレスラーがリングの上で水死しようとも、その度に『カール・マルクス』たちが度胆を

抜かれ死ぬほど驚かされ恐怖のあまり右往左往しあげくの果てに正面衝突し口から泡あわを吹いてぶったおれるというのに、へいちゃらで存在することができたのである。

『^{*6}が消滅する兆きざしはどこにもなかった。』

『カール・マルクス』たちは死にかけており、どこからも助けがやってくる気配はなかった。

『おれは死ぬまで退屈しつづけるだろう』と『カール・マルクス』は考えざるを得なかった。

つまり一切は元もとに戻もどってしまったのだ。『

』^{*7}だけが残ったのである』

わたしは話を中断した。

「面白くない」と娘が文句をつけたのだ。

「あいまいだわね」と女も同調した。

「滅茶苦茶めっちゃくちゃ」と娘。

「馬鹿ばかみたい」と女。

「うるさい」と私は言った。

「どんな話をしようとしたの勝手だ。聞きたくないなら、二人ともさっさと寝ちまえ」

「七ヶ所、空白があったよ」と娘。

「*から*まで。あそこには何が入るの？」

今度はわたしがうろたえる番だった。

「実は何を入れていいのかわからないんだ。何か入れなくちゃいけないんだけどね、あとで考えるよ」

「待っちゃいられないね」と娘。

「そうとも」と女。

「わたしたちにばっかり話させてさ、ふん、おまえなんか尻けつくらえ！」

「わかったよ」

わたしにはわたしの悩みがあるのだ。だが、それを言い訳にすることはできない。

『の中に入れる言葉を捜してくるまで、今までのテープを**PLAY** **BA**
CK。

START

虹の彼方に

わたしは現在、一九八〇年代のはじめにいて、わたしの部屋には三台の冷蔵庫と一台のベツドがあるきりである。この部屋はひどく暑い。

ほんとに暑い。もう一台、冷蔵庫が欲しいと女はしょっちゅうこぼしている。

ただ一つの窓からはラブ・ホテルが見える。ラブ・ホテルは繁盛している。他には何も見えない。

夜中になるとわたしと女は道路を眺める。

象が通るかも知れないからだ。

「一億年前には」と神奈川新聞に書いてあった。「ここに象がいた」

象たちが帰ってくるとしたら、きっと人目につかない夜中にちがいないというのが女の説なのだ。

まだ象は現れない。やつらが通りかかったら起こして、とことづけて女はねむってしまった。

象は通らないが伊藤整の「日本文壇史」ならいつも歩きまわっている。ベレー帽を目深にかぶり、マスクをし、軍手をはめ、首からは双眼鏡、尻しりのポケットには懐中電灯。

わたしは一九八〇年代の深夜に伊藤整の「日本文壇史」がそんな格好でラブ・ホテルの周りを徘徊はいかいする理由を考えてみた。

もしかしたら、やつは死に場所をさがしているのかも知れない。

ビールを飲みたくて精神病院から脱走した伊藤整の「日本文壇史」。長く生きすぎた。もう死にたいよ。ビールはまだか？　そして、なにかの拍子に、自分自身のページをめくってしまった。ハンカチと自分を取り違えてしまったのだ。何だこれは？　あつ、おれか。

『彼は着物の上に法衣を着て、その寺を出、再び、一年前と同じく、しかし全くあてもなく、金もなく、西の方に向つて歩き出した。日暮れ方に、彼はひどく空腹になつた。彼は一軒の寺を見つけて宿を乞うたが、四十位の尼に追ひ返された。年とつた寺男が彼を憐れみ、握飯を二つくれた。彼は涙をこぼした。彼の袂からは思ひがけず十銭銅貨が出て来た。彼は七銭で木賃宿に泊り、三銭で朝飯を得た。次の日も一日歩いた。どこを歩いてゐるかも分らず、機械的に足を動かしてゐた。犬に吠えられ、腹がへり、咽が乾き、目舞ひがして来た。夕方彼は海岸の砂山の墓地に供へた茶碗に溜つた水を飲んだ。海が見えた。その暗い海が自分の墓のやうな気がした。彼は海の方へ歩いて行つた。波打ち際まで来た時、彼は考へた、「こ

の世の中には自分の知らないことが沢山ある。いまここで死んでもつまらない」と。そして彼は波打ち際から引きかへした」

引きかへすんぢやなかつた。兄あにちゃん！ おれのビールが先だ！ ああ、狼おおかみになりたい！

わたしには伊藤整の「日本文壇史」の内心の悲鳴が聞こえたのだ。思わず、わたしは窓から身をのりだしていた。すると、何とということであろう。その奇怪な制服を着た男はどこを歩いてゐるかも分らず、機械的に足を動かしてゐるではないか、そしてそこの犬に吠えられ、腹がへり、咽が乾き、目舞ひがして電柱につかまり、ラブ・ホテルの裏の公園をながめているではないか。男には若いカップルが消えていったその暗い公園が自分の墓のやうな気がしたのだ。

まちがいない！ やつは死ぬつもりなのだ。

深い孤独と沈痛な思いの果てに。

わたしは窓から叫んだ。

「おい！ 伊藤整の「日本文壇史」！ いまここで死んでもつまらない！ 戻もどっておいでよ」
男は一目散に逃げ去った。

「なあに？ 象？」

「いいえ」とわたしは答えた。

「痴漢でした」

ベッドには女が寝て、わたしは床に置いたシュラフにもぐりこんでねむる。これはわたしが高校生のときに、教師から教わった方法なのだ。

かれは31歳の共産党員（のようなもの）で、毎晩シュラフにくるまってねむり、かれの32歳の妻（のようなもの）はベッドにねむった。

「どうしていっしょにねむらないんです？」

「いっしょにねむってるよ」

実際かれはかれの妻（のようなもの）がねむっているベッドの下でいっしょにねむった。

二人は概ね寝つきの良い方だった。ねむれない時には野球の話をした。

「金田？」

「北川！」

「村山？」

「バッキー！」

「……………」

「……………」